



自然たっぷりの田畑を未来に

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員
三井化学アグロ株式会社 代表取締役社長

谷 和功

本年（2015年）4月に三井化学アグロ（株）の社長を仰せつかった。農業事業は素人に近い状態からのスタートなので、皆さんに支えられながら、何とか半年が過ぎたところである。

生まれは大阪…とはいっても、富田林という南河内の田舎に江戸時代から続く庄屋の分家で、すなわち農家であるが、祖父の代からはご多分に漏れず、農業ではない仕事が多くなっている。今回、農業に関わる仕事をする事となり、何かの因縁を感じるとともに、安全、安心、安定的な食糧確保に貢献できることは、大きな喜びである。

今もまだ実家の周りは田畑に囲まれているが、小さいころの遊び場所は、この田畑と農業用水路であった。そこには、自然がたっぷりで、タニシ（名前から親しみを感じる）、カブトエビ、コブナやドジョウ、ミズスマシやゲンゴロウ、トンボやホタル、ザリガニやカエル、それらを狙う青大将やマムシなどがいて、それらを捕まえて遊んだものである。中でも一番大きな農業用水路は、応神天皇陵などの古市古墳群の堀に川から水を引くために建設されたという歴史あるもので、そこでの蛭狩り…今のように見るだけでなく、本当に網で狩ってしまうもの…は、楽しい初夏の行事であった。

ある時期から、これらの小動物がいなくなり、農業のせいだと聞かされた。その後、学年も進み、田畑で遊ぶこともなくなったので、このような話は忘れてしまっていたが、化学会社に就職して、最初に配属された工場では農業を作っていたので、また気になるようになり、環境に影響を与えない農業が必要だと思っていた。実際、農業はそのようなものになっていき、数十年前から、田畑や用水路の環境は、ずいぶんよくなってきており、先に述べたような小動物が数多く戻ってきている。今も実家に帰ると、周りの田畑を眺めたり、用水

路の掃除に参加したりしているが、これら小動物がたくさんいるのに驚かされる。

弊社では、「『田んぼの生きもの調査』おうえん隊」を結成し、消費者、農家などの方々と田んぼに入り、生きもの調査を体験しながら、これからの農業や食、環境について真剣に考えていこうという取り組みをしている。今年も何回かの調査を行い、7月30日には、文部科学省で開催された「霞が関子ども見学デー」に「田んぼの生きもの」を出展し、子供たちがブース前で列をなすほどの好評を博した。農業が、自然、環境との調和を図りつつ、農業生産に貢献しているということを理解していただく良い機会になったと思っている。

「草」という点では、やはり子供のころから、あぜ道のつくしを採り、ヨモギで餅を作り、秋の彼岸花を見て育った（「植調」の表紙の写真は懐かしい草ばかりである）。しかし、今は実家で放置している畑に生える雑草の駆除に苦労している。草は刈っても刈っても育ってきて、除草剤にもお世話になるが、その威力に感心する。

先日、ミラノ万博に行った折、イタリアの穀倉地帯のコメ農場を訪問する機会を得た。一見日本の稲作地帯に似た風景だが、ヒエをはじめとする雑草が多いのにびっくりした。半分以上がヒエという、農業として成り立っているのか？ といういらぬ心配をするほどの田んぼも散見され、日本の自然と一体化した美しい田園風景とは大違いであった。直播のせいもあるが、日本の農業の技術の確かさときめ細やかさを改めて感じる事ができた。

これからも、高品質の製品・サービスを農業生産者の皆様に提供し、安全、安心な食糧を安定的に届けるという社会課題に貢献するとともに、美しく自然がたっぷりの田畑を未来に残していけることを願っている。